

上やむを得ないであろう。一般向きの書としては、決して学問的水準を損っていないように思われるし、しかも、この点に關してもこの度の改訂は注意を払っているように思われる。むしろ、本書にはかの「民衆史観」や「非神話化」といった問題の欠けていることが、より重要な相違点をなしていると言ひ得るかもしれない。但し、その善し悪しについては評価の分かれる所であらう。

いづれにせよ、岩波新書『十字軍』と本書とは、共に相俟つて著者の十字軍像を完成するものであらうし、両者を併読することが最も望ましいであらう。本書が新書版という形で再び世に出されたことを喜びたい。

(新書判 二五七頁 一九八〇年六月
教育社 六〇〇円)
(八塚春児 京都教育大学講師)

小玉新次郎著

パルミラ——隊商都市——

介

紹

長年パルミラの研究を手懸けてこられた小玉氏が、その成果を世に問うたのが本書

である。パルミラは、シリア砂漠のほぼ中央に位置するオアシス都市で、紀元前一世紀末より急速に発展し、三世紀後半、女王ゼノビアのとき最盛期を迎えた。この王国は、地中海とメソポタミアとを結ぶ最短ルートの中継地点として、またローマ帝国とアルサケス朝ペルシアという二大強國に挟まれた、悲劇の小王国として史上知られている。

本書は四章から成っている。

第一章隊商都市。ここでは、パルミラの置かれた地理的・歴史的状况を説明し、そこが隊商交易を基盤として繁栄する条件を備えていたことを述べたのち、現在までに発掘されているパルミラの遺跡の概要を解説する。

第二章パルミラ人の商業活動。まず、パルミラより出土した「関税法碑文」の分析を通して、当時行なわれていた商業活動の具体像を現出させる。パルミラ語とギリシア語で記された碑文は、土着産業の発展と商人勢力の抬頭によつて隊商都市としての地位を確立していた、パルミラの姿を生と物語っている。同じ頃、ユーラシア大陸を東西に貫ぬく所謂シルクロードの東部

に位置していた、ローラン王国の故地より発掘されたカロシュティーン文書に、商業活動を示す記事が見当らないことと比較しても、関税法碑文の内容は極めて興味深いものである。ついで、パルミラやその他の地から発見された碑文および文献史料より、パルミラ人の西アジア各地への進出を跡付ける。さらに、シリアの他のオアシス都市のうちからベトラとドゥッラ・ユローボスを取り上げて歴史を概説し、交易路の移動によつて、それらからパルミラへと交易の中心が移動した過程を説明する。

第三章パルミラ人の宗教と美術。第1節ペール神崇拜と第2節塔墓と地下墓室とで宗教世界より見たパルミラの歴史を再現し、第3節中国製絹織物の出土と第4節パルミラ美術では、パルミラの文化は東西諸文化を摂取吸収することによつて形成された独自の文化であったと述べる。ここで注目されるのは、中国から輸入された漢の経錦が、西方で、羊毛を織るのに適した独自の技法によつて改良され、やがて、大きな模様を織り出した緯錦として、唐代の中国に逆輸入されたということである。

第四章パルミラの歴史。パルミラが繁栄

した紀元一世紀から三世紀の政治史を解説し、三世紀後半に登場してバルミラを栄光と破滅へと導いた、女王ゼノビアの生涯を以って結んでいる。

著者は本書で、東西文明の溶鉱炉としてのバルミラではなく、その影響を受けつつも、奔流に流されることなく独自の世界を形成していった、バルミラ人の姿を描くことに成功している。バルミラの歴史を多方面から研究し、その立体像を鮮明に浮かび上がらせたのが国最初の著書として、本書は高く評価されよう。

(四六判、二八三頁、一九八〇年四月十日、近藤出版社、世界史叢書24、二二〇〇円)

(堀川 徹・京都大学助手)

富山県教育委員会編

『高樹文庫資料目録』

昭和五二、五三年度

『歴史資料緊急調査報告書』

『高樹文庫』というのは、財団法人高樹会の有となっている図籍・資料をいい、石黒信由(一七六〇—一八三六)以後、歴代石黒家に伝えられてきた旧蔵書・資料類を内容とする。「高樹」の名称は信由の書齋

号「高樹堂」に由来する。

石黒信由は、宝暦一〇年射水郡高木村(現新湊市高木)の豪農の家に生まれ、二三歳で家督を継いだあと、天明四年高木村肝煎となって以来、新田開発・用水建設・検地測量・地図作成などにすぐれた力量を発揮した農村のリーダーである。

彼は、算学を関孝和の流れを汲む中田高寛に、また天文・暦算を麻田剛立門下の西村多沖に、また測量術を宮井安泰に学ぶなどすぐれた指導者について科学の教養を培った。ことに算学に卓抜な成果をあげ、この時期空前の業績といわれる代表的著作「算学鉤致」をはじめ数多くの著作がある。

また検地・用水・新田・郡村・市街にかかわる地図や海図も数多く残されている。さらに冊子類のなかにも、文化年間の測量野帳などがおびただしく存在する。これらが基礎となりより広域にわたる「加能越三州図」「三州測量図籍」「加能越三州大路水経」などの地図・図籍類もまた彼のすぐれた成果を伝えるものである。ここに記したものはごくわずかな一端で、その著作はすくぶる多く、彼の多才ぶりをあらわす。

このような学才は、信由以後の子孫にも

すぐれた人物が出て継承され、父祖のコレクションをも保存してきた。

その全貌は

- 一、和算資料(約一、〇〇〇部)
- 二、古文書(約一、五〇〇部)
- 三、古地図(約一、二五〇部)
- 四、国書(約二五〇部)
- 五、漢籍・準漢籍(約二〇〇部)

に器具二〇点がふくまれる。これらの内容について、これまでも田中鉄吉・早苗藤作氏によって和算資料が、また中島正文氏によって古地図が、調査あるいは分類・整理され、部分的に目録がつくられたことがあった。

これら資料の全体は、昭和三四年富山県指定文化財とされ、さらに富山県文化財保護条令にもとづいて、一括して富山県指定有形文化財(書籍)に指定されながら、その膨大な量と内容の難しさのために、なお完全な目録のないままに推移し、以来一刻も早く総括的な資料目録の出現が望まれていた。このたび富山大学文学部の楠瀬勝氏を主編とし、木下良・永田英正・藤森勉・藤本幸夫氏等の富山大学関係者、高瀬保・竹内伸一・保科斉彦・新田二郎氏等富山